

備前
國人

佐柿入道常圓物語

(一名高松城攻物語)

解題

備前國人常圓物語

一卷

著者 村瀬安兵衛

此書、史籍集覽本は高松城攻物語と改題せり。著者佐柿入道は、備前藩士にして、通稱彌左衛門といふ。天正十年親しく高松城攻に従軍し、その遭遇目覩せしことを、同藩士村瀬安兵衛に物語りしを、貞享年中安兵衛がこれを記し置けるものなれば、即ち高松水攻の實歴談といふべきものなり。

今回刊行せるものは、高取氏所藏本を底本としたるものなり。

備前 國人 佐柿入道常圓物語

著者 不 詳

佐柿彌右衛門入道常圓と云者、百餘歳迄長命成る者也。村瀬安衛内々、常圓は秀吉公の御供にて、備中高松攻を目的のあたり見たる人と聞及て、常圓へ常に出入する町人に頼み、懸御目にて高松攻の不審なることを承度と尋ねければ、同道仕候得と有ける故、ある時彼町人につれて参たり。常圓ふとき杖つきて座敷へ出て見ると其儘、さて〳〵若き人の奇特なる事哉。さて我等にあひて高松攻の不審なる事聞度とは、何事にやと云ふ。安兵衛先づ、懸御目・忝存候。さて秀吉公高松城御攻被成候事、門前村よりカヘルガハナ迄大方一里程の長さに堤を御築候。其間に城よりウカ〳〵と仕、見物して居申候も不審に存候。將又毛利家大軍にて後詰に出候て陣向、たゞ間は二十町にたらざる所に居て見物したるのみにて、長き堤を切てはなす事さへ不成、一戦の事は承不レ及申候事、不審千萬に候と申す。常圓云、いかにも尤の不審に候。いで〳〵其時の事語り聞せ可申。我其時は御馬廻にて、御馬の蹄ほうじの時も御供仕たる事なれば、忝敷存候。先づ鳥取の城はゆる〳〵と御取巻、兵糧詰に被成御落し候しが、それとは事かはり、次に冠の城は一時攻に攻落し被成候。手負死人も多く候いき。此勢を聞き、河屋の城は早速明け退きたるゆゑに、備前備中の境の上に御人數を被備候。一兩日御座候ひしが、高松の城は水攻可然と思召けるにや、被仰けるは、我只今馬を乗行くべし。その足あと次第に早々ほうじをさしかへと被仰付、其儘御乗出し被成、御供たゞ七八人にて、門前村よりカイルガハナ迄御乗被成候。此時城中より鐵炮打かけ、御羽織に玉二つまであたり候へども、すこしもさわがず御乗通り被成候。それより前に被仰付たる塀數百間、并に井樓矢倉を夜中に御つけさせ被成けるが一夜の間に悉く塀をかけ、五十間に一ツ宛矢倉をあげ、外より見れば矢倉に白土迄つけ申候。白土は白土にあらず。白紙にて張たる障子を以てかこひたる也。矢倉々々より弓鐵炮にて、打すくめ射すくめて、塀の陰にては堤を築候。

*冠城とは備中
冠山城をいふ

中々小人數の城兵の出べき様はなかりし也。扱堤も出來て、秀吉の御運にやよりけん。三日の間しのつく程一雨ふりけり。門前村の外にひろさ三十間程の砂川あり。つねは脚袴のぬるゝばかりの淺水也。川上に大井村と云ふある故に、川の名を大井川と云ふ。彼三日の大雨にて川瀧と成て流るゝ時、秀吉の仰にて人數二千計手と手を取合て此川の門前村の前へひらくと入て、人にて水をせかせ玉ひければ、其川下は二三尺迄はなき程淺瀬と成ける所を、土俵を以てつき切り、門前村の前の堤の口へ入れれば、逆卷に城外へ水滔々と、目コスらぬ間に大海の如く成ける。扱城外の山々の城の方へ流るゝ雨脚は云ふに不_レ及、備前の方の山半分_ニ溝を付て、備中高松の方へ流しかけるなり。於_レ今其山水備中の田地へ取り申故に、備前の水にて備中の田を作ると俗_ヒの申は、此時よりとぞ。右の譯にて城中の兵何の分別出すべき様もなく、寢耳に水の入たる様にて、あきれたるばかりと見え申候。扱毛利家の後詰も、彼ミセ櫓に見驚き、僉議評定はかもゆかぬ間に、城は水にひたりける故、城主清水氏切腹す。やがて京の大變申來りければ、和議して互に誓紙人質取かはし、人數御引取被_レ成候時、彼堤を切てはなさせ其儘御引取被_レ成候へば、俄に毛利家の陣所との間大海の如くに成て、たとひ追討の心ありても、何ともすべき様なき事にてありし也。備前の秀家は幼少にて岡山の城より出向、半田山のあたりにて、秀吉公御對面なりし時、秀吉公のめされたる乘輿の中に入たまひ、様々御ねんごろにていろく御はなし扱被_レ成、今より以後我養子と御約束被_レ成、沼の城のあたり迄御つれ被_レ成、それより御かへし被_レ成ける也。秀家よりの加勢の人數も先へ押させ玉ふ。扱飛脚を被_レ遣_ニ播州_一、町在郷に限らず、法華宗の出家悉く城下へ集り候へ、萬部の御經被_レ仰付_ニ給ふて、信長公の御吊可_レ被_レ成と、しき波に被_レ仰遣_ニ御乘輿の内にてはひたもの御眠被_レ成、正體なく見えさせ玉ひ、をりく御馬にめしけるが、たわいもなく御ねふり被_レ成、四五度御落馬被_レ成ける程に、姫路に御着被_レ成て御やすみ被_レ成、御法事も三七日も過後こそ、上方御出馬なるべきと申けるに、姫路へ御着被_レ成たる夜中に、はや御陣觸にて、明る朝は御出馬也。後に思ひ合せ候へば、かく御くたびれ被_レ成、其上御とぶらひに日數有_レ之と、光秀方へ聞えたるやらん。明智左馬亮に人數を分て安土へ遣し、油斷したる所に、急に御上り故、山崎にて明智の謀は後に成り、敗軍したると存候。尼崎にて諸大名髮を切て、信長公

の事をなげき玉ふ時、秀吉公もなげき玉ひて、此上は何れも一味同心にて、明智を討取可_レ申外は無_レ御座_レ候。何れも左様に被_レ思召_レ候へと敬て、成程慇懃に同輩の模様も見えける也。明智敗軍の時、諸大名へ御あしらは、ほねをりく_レと被_レ仰、皆家來あしらひに被_レ成、大に威がつき候ひしなり、とかたられける。

右佐柿彌右衛門入道常圓は、二百五十石被_レ下隠居被_レ申候。其子は盲目にて孫を子とし、少將様より二百五十石被_レ下、是も佐柿彌右衛門と申けるが、死して無_レ子して跡つぶれ申處に、少將様佐柿の跡はつぶすべからずとて、石田鶴右衛門二男を跡に御立被_レ成、佐柿彌右衛門とて居けるが、あほうつくして跡つぶれ申候。

村瀬安兵衛は、伊木勘解由にて二百石賜り申候。右常圓の物語聞候は、浪人の内若き時の事也。

貞享四年卯の十月安兵衛物語之通書付也。

備前國入佐柿入道常圓物語終